

樋口一葉

うつせみ



う
つ
せ
み

一

家の間数まかずは三畳敷の玄関までを入れて五間、手狭てざまなれ
 ども北南吹とほしの風かぜ入りよく、庭は広々として植込の
 木立も茂ければ、夏の住居すまゐにうつつつけと見えて、場処
 も小石川こいしかはの植物園にちかく物静なれば、少しの不便きずを疵
 にして他には申旨のなき貸家ありけり、門かどの柱に札をは
 りしより大凡おほよそ三月ごしにも成けれど、いまだに住人すみてのさ

だまらで、主ぬしなき門の柳のいと、空むなしくなびくも淋しか
 りき、家は何ど処こまでも奇麗にて見こみの好ければ、日の
 うちには二人ふたり三人みたりの拝見をとて来るものも無きにはあら
 ねど、敷金三月分、家賃は三十日限りの取たてにて七円
 五十銭といふに、それは下町の相場とて折かへして来る
 は無かりき、さるほどにこのほどの朝まだき四十に近か
 るべき年輩としごろの男、紡績織ゆかたの浴衣も少し色のさめたるを着
 て、至極そそくさと落つきの無きが差配のもとに來たり
 てこの家の見たしといふ、案内して其そこ処ここと戸棚の数
 などを見せてあるくに、それ等のことは片耳にも入れで、

唯四辺あたりの静にさわやかなるを喜び、今日より直すぐにお借り
 申まする、敷金は唯今置いて参りまして、引越しはこの
 夕暮、いかにも急速では御座りますが直様掃除すぐさまにかかり
 たう御座りますとて、何の子細なく約束はととのひぬ、
 お職業はと問へば、いゝ別段これといふ物も御座りませ
 ぬとて至極曖昧あいまいの答へなり、御人数ごにんずはと聞かれて、その
 何だか四五人の事も御座りますし、七八人にも成ります
 し、始終とほしごたごたして埒らちは御座りませぬといふ、妙な事
 のと思ひしが掃除のすみて日暮れがたに引移り来たりし
 は、相乗りの幌ほろかけ車に姿をつつみて、開きたる門を真

直に入りて玄関におろしければ、主は男とも女とも人には見えじと思ひしげなれど、乗りみたるは三十ばかりの気の利きし女中風と、今一人は十八か、九には未だと思はるるやうの病美人、顔にも手足にも血の氣といふもの少しもなく、透きとほるやうに蒼白さがいたましく見えて、折から世話やきに来てゐたりし、差配が心に、此人を先刻のそそくさ男が妻とも妹とも受とられぬと思ひぬ。

荷物といふは大八に唯一くるま来たりしばかり、両隣にお定めの上産は配りけれども、家の内は引越らしき騒

ぎもなく至極ひつそりとせし物なり。人数にんずはかのそそく
 さにこの女中と、他には御飯たきらしき肥大ふとつてう女および、
 その夜に入りてより車を飛ばせて二人ほど来たりし人あ
 り、一人は六十に近かるべき人品ていはつよき剃髪ていはつの老人、一人
 は妻なるべし対つひするほどの年輩としばいにてこれは実法に小さき
 丸鬚まるまげをぞ結ひける、病みたる人は来るよりやがて奥深に
 床を敷かせて、括くくり枕つむりに頭つむりを落つかせけるが、夜もす
 がら枕近くにありて悄しよんぼり然とせし老人としより二人の面おもやう、何
 処やら寝顔に似た処のあるやうなるは、この娘このもしも
 父母にては無きか、かのそそくさ男を始めとして女中と

も一同旦那さま御新造様と言へば、ごしんぞさま 応々と返事して、男おいおいの名をば太吉たきち太吉と呼びて使ひぬ。

あくる朝風すずしきほどに今一人車を乗りつけける人の有けり、つむぎ 紬ひとへの単衣に白ちりめんの帯を巻きて、鼻の下に薄ら髯ひげのある三十位のでつぶりと太ふとりて見だてよき人、小さき紙に川村太吉と書て張りたるを讀みて此処だ此処だと車よりおりける、姿を見つけて、おお番町の旦那様とお三どんが真先にたすき 襷たすきをはづせば、そそくさは飛出していやお早いお出いで、よく早速おわかりに成りましたな、昨日きのふまで大塚おほつかにお置き申したので御座りますが何分

最早もとう、その何なにだか頻しきりに嫌いやにお成りなされて何ど処こへか行ゆ
 かう行かうと仰おつしやる、仕方が御座りませぬで漸やっとまあ
 此処ちよいとをば見つけ出しまして御座ります、御覧下さりませ
 一寸ちよいとこうお庭も広う御座りますし、四隣まはりが遠うござりま
 すので御気分の為にも良からうかと存じまする、はい昨ゆふ
 夜べはよくお眠やすみに成りましたが今朝ほどは又少しその、一寸ちよつと
 御様子が変わつたやうで、ま、いらしつて御覧下さりませ
 と先に立て案内をすれば、心配らしく髭ひげをひねりて奥の
 座敷に通りぬ。

二

気分すぐれて良き時は三歳児みつごのやうに父母の膝ひざに眠ねぶる
 か、白紙を切つて姉様の製造おつくりに余念なく、物を問へばに
 こにこと打笑うちゑみて唯ただはいはいと意味もなき返事かへしをする
 温順をとなしさも、狂風一陣こぞ梢えだをうごかして来るきた氣の立つた
 折をりには、父様とうさんも母様かあさんも兄様にいさんも誰たれれも後生ごしやう顔かほを見せて下
 さるな、とて物陰ものかげにひそんで泣く、声こゑは腸はらわたを絞しぼり出す
 やうにて私が悪わるう御座ござりました、堪忍かんにんして堪忍かんにんしてと繰くり

返し繰返し、さながら目の前の何やらに向つて詫るわびやうに言ふかと思へば、今行ゆきまする、今行ゆきまする、私もお跡から参りまするとて日のうちには看護まもりの暇をうかがひて駆け出いだすこと二度三度もあり、井戸には蓋を置き、きれ物とては鋏はさみ刀一挺ちよう目にかからぬやうとの心配りも、危あやふきは病ひのさする業かも、この纖弱かよわき娘一人とり止むる事かなはで、勢ひに乗りて駆け出いだす時には大の男二人がかりにてもむつかしき時の有ける。

本宅は三番町の何処やらにて表札を見ればむむあの人
の家かと合点のゆくほどの身分、今さら此処には言はず

もがな、名前の恥かしければ病院へ入れる事もせで、医者
 は心安きを招き家は僕ぼくの太吉といふが名を借りて心ま
 かせの養生、一月と同じ処に住へば見る物残らず嫌やに
 成りて、次第に病ひのつのである事見る目も恐ろしきほど悽すさ
 まじき事あり。

当主は養子にて此娘これこそは家につきての一粒ものなれ
 ば父母が歎きおもひやるべし、病ひにふしたるは桜さく
 春の頃よりと聞くに、それよりの昼夜隸まぶたを合する間も
 なき心配に疲れて、老たる人はよろよろたよたよと二人
 ながら力ななささうの風情ふぜい、娘が病ひの俄にはかに起りて私は

もう帰りませぬとて駆け出すを見る折にも、あれあれど
 うかしてくれ、太吉太吉と呼立てるほかには何の能なく
 情なき体なり。

昨夜は夜もすがら静に眠りて、今朝は誰れより一はな
 懸けに目を覚し、顔を洗ひ髪を撫でつけて着物もみづか
 ら気に入りしを取出し、友仙の帯に緋ぢりめんの帯あげ
 も人手を借ずに手ばしこく締めたる姿、不図見たる目に
 はこの様の病人とも思ひ寄るまじき美しくしさ、両親は見
 返りて今更に涕ぐみぬ、附そひの女が粥の膳を持来た
 りて召上りますかと問へば、嫌や嫌やと頭をふりて意

気地もなく母の膝へ寄そひしが、今日は私の年季ねんが明ま
 するか、帰る事が出来るで御座んせうかとて問ひかける
 に、年季ねんが明るといつて何処へ帰るりようけん了簡、此処はお前
 さんの家では無いか、このほかに行くところも無からう
 では無いか、分らぬ事を言ふ物ではありませぬと叱られ
 て、それでも母様かあさま私は何処へか行くので御座りませう、
 あれ彼方あすこに迎ひの車が来てゐます、とて指さすを見れ
 ば軒端のきばのもちの木に大いなる蛛くもの巣のかがりて、朝日に
 かがやきて金色の光ある物なりける。

母は情なき思ひの胸に迫り来て、あれあんな事を、貴君あなた

お聞遊しましたかと良人を向つひて忌はし氣にいひける、
娘は俄しほに萎れかへりし面おもてに生々とせし色を見せて、あ
のそれをととし一昨年のお花見の時ねと言ひ出いだす、何ゑと受けて
聞けば学校の庭は奇麗でしたねへとて面しろさうに笑
ふ、あの時貴君あなたが下すつた花をね、私は今も本の間へ入
れてありまする、奇麗な花でしたけれどももう萎れてし
まひました、貴君にはあれから以来御目にかからぬでは
御座んせぬか、何故なぜ逢なひに来て下さらないの、何故帰つ
て来て下さらぬの、もうお目にかかる事は一生出来ぬの
で御座んするか、それは私が悪う御座りました、私が悪

いに相違ござんせぬけれど、それは兄様にいさまが、兄が、ああ誰れにも済ませぬすみ、私が悪う御座りました免ゆるして免してと胸を抱いて苦しさうに身を悶もだゆれば、雪子や何も余計な事を考へては成りませぬよ、それがお前の病気なのだから、学校も花もありはしない、兄様にいさまも此処にお出でなさつてはゐないのに、何か見えるやうに思ふのが病気なのだから気を落つけて旧もとの雪子さんに成ておくれ、よ、よ、気が付きましたかへと脊せを撫でられて、母の膝の上
にすすり泣きの声ひくく聞えぬ。

三

番町の旦那様お出いでと聞くより雪や兄様にいさんがお見舞に来て
 下されたと言へど、顔を横にして振向ふともせぬ無礼を、
 常ならば怒りもすべき事なれど、ああ、捨てて置いて下
 さい、氣に逆らつてもならぬからとて義母ははが手づから与
 へられし皮蒲団かはぶとんを貰ひて、枕もとを少し遠ざかり、吹く
 風を背にして柱の際もくねんに黙然としてゐる父に向ひ、静に一
 つ二つ詞ことばを交へぬ。

番町の旦那といふは口数少なき人と見えて、時たま思ひ出したやうにはたはたと団扇うちばづかひするか、巻煙草の灰を払つては又火をつけて手に持もつてゐる位なもの、絶えず尻目に雪子の方かたを眺めて困つたものですなと言ふばかり、ああこんな事と知りましたら早くに方法も有つたのでせうが今に成つては駟馬しめも及ばずです、植村も可愛想な事でした、とて下を向いて歎息の声を洩らすに、どうも何とも、我は悉皆世しつかいせ上じようの事に疎しな、母もあの通りの何であるので、三方四方埒らちも無い事に成つてな、第一は此娘こねの気が狭いからではあるが、否植村うやも気が狭いか

らで、どうもこんな事になつてしまつたで、我等わしどもら二人
 が実に其方そちらに合はせる顔も無いやうな仕義でな、然し雪
 をも可愛想と思つて遣やつてくれ、こんな身に成つても其そ
 方ちらへの義理ばかり思つて情ない事を言ひ出しをる、多少
 教育も授けてあるに狂気するといふは如何いかにも恥かしい
 事で、この方から行くと家の恥辱にも成る実に憎むべき
 奴ではあるが、情実を汲くんでな、これほどまで操といふ
 ものを取止めて置いただけ憐あはれんで遣やつてくれ、愚鈍で
 はあるが子供の時からこれといふ不出ふで来かしも無かつたを
 思ふと何か残念の様にもあつて、誠の親馬鹿といふので

有らうが平癒なほらぬほどならば死ねとまでも諦あきらめがつきか
 ねる物で、余り昨今忌はしい事を言はれると死期しごが近よ
 ったかと取越し苦勞をやつてな、大塚の家うちには何か迎ひ
 に来る物が有るなどと騒さわぎをやるにつけて母がつまらぬ
 易者などにでも見て貰つたか、愚ぐな話しではあるが一月
 のうちに生命せいめいが危ふいとか言つたさうな、聞いて見ると
 余り心よくも無いに当人も頻しきりと嫌がる様子なり、ま、
 引移りをするが宜からうとて此処を探させては来たが、
 いやどうも永持はあるまいと思はれる、殆ほとんど毎日死ぬ死
 ぬと言て見る通り人間らしい色艶いろつやもなし、食事も丁度一

週間ばかり一粒りゆうも口へ入れる事が無いに、そればかり
 でも身体からだの疲労が甚しからうと思はれるので種々いろいろに異見
 も言ふが、どうも病せいひの故であらうかとかくに誰れの言
 ふ事も用ひぬには困りはてる、医者は例の安田が来るの
 でかう素人しろうとまかせでは我ままばかりつにつて宜く有るま
 いと思はれる、我わしの病院へ入れる事は不承知かと毎毎聞
 かれるのであるが、それもどう有らうかと母などは頻しきり
 にいやがるので我も二の足を踏ふんでゐる、無論病院へ行
 けば自宅と違つて窮屈ではあらうが、何分この頃飛出し
 が始まつて、我わしなどは勿論もちろん太吉と倉くらと二人ぐらゐの力で

は到底引とめられぬ働きをやるからの、万一井戸へでも懸られてはと思つて、無論蓋はして有るが往來へ飛出されても難義至極なり、それ等を思ふと入院させやうとも思ふが何か不憫ふびんらしくて心一つには定めかねるて、其方そちらに思ひ寄よりも有らば言つて見てくれとてくるくると剃そりたる頭つむりを撫でて思案あたまに能はぬ風情ふぜい、はあはあと聞きる人も詞は無くて諸共もろともに溜息ためいきなり。

娘は先刻さきの涙に身を揉もみしかば、さらでもの疲れ甚しく、なよなよと母の膝へ寄添ねぶひしまま眠れば、お倉お倉と呼んで附添をなごひの女子ぐんないと共に郡内ぐんないの蒲団の上へ抱いだき上げ

て臥ふさするにはや正体も無く夢に入るやうなり、兄といへるは静に膝行いざり寄りてさしのぞくに、黒く多き髪いとをの毛を最惜いとをしげもなく引つめて、銀杏返いちようがへしのこはれたるやうに折返し折返し鬚形まげなりに畳みこみたるが、大方横に成りて狼藉ぜきの姿なれども、幽霊のやうに細く白き手を二つ重ねて枕のもとに投出なげいだし、浴衣の胸少しあらはに成りて締めたる緋ぢりめんなまめの帯あげの解けて帯より落かかるもなまめ婀なまめかしからで惨いたましのさまなり。

枕に近く一脚の机を据ゑたるは、折ふし硯すずりすずり々と呼び、書物よむとて有し学校のまねびをなせば、心にまかせて

紙いたづらせよとなり、兄といへるは何心なく積重ねたる反古紙ほごがみを手に取りて見れば、怪しき書風に正体得えしれぬ文字を書ちらして、これが雪子の手跡かと情なきやうなる中に、鮮かに読まれたるは村といふ字、郎といふ字、ああ植村録郎、植村録郎、よむに得堪へずして無言にさし置きぬ。

四

今日は用なしの身なればとて兄は終日此処にありけ

り、氷を取寄せて雪子の頭つむりを冷す看護つきそひの女子をんなに替りて、
 どれ少し我がわしがやつて見やうと無骨らしく手を出いだすに、恐
 れ入ます、お召物が濡れますと言ふを、いいさ先まづさせて
 見てくれるとて氷袋の口を開いて水を搾しぼり出す手振りの
 無器用さ、雪や少しはお解りか、兄様にいさんが頭つむりを冷して下
 さるのですよとて、母の親心付つけれども何の事とも聞分ききわけぬ
 と覚しく、目は見開きながら空くうを眺めて、あれ奇麗な蝶
 が蝶と言ひかけしが、殺してはいけませんよ、兄様にいさん兄
 様と声を限りに呼べば、こらどうした、蝶も何も居ない、
 兄は此処だから、殺しはせぬから安心して、な、宜いか、

見えるか、ゑ、見えるか、兄だよ、正雄だよ、気を取直して正気になつて、お父さんとつやお母さんつかを安心させてくれ、こら少し聞分てくれ、よ、お前がこの様な病氣になつてから、お父様もお母様も一晩もゆるりとお眠やすみに成つた事はない、お疲れなされてお瘦やせなされて介抱してゐて下さるのを孝行のお前に何故わからない、平常つねは道理がよく了解わかる人では無いか、気を静めて考へ直してくれ、植村の事は今更取かへされぬ事であるから、跡でもねんごろ懇ともらに吊つて遣れば、お前が手づから香花こうはなでも手向たむければ、あれは快めいよく瞑めいする事が出来ると遺書ゆいしょにも有つたと

言ふでは無いか、あれは潔よくこの世を思ひ切つたので、お前の事も合せて思ひ切つたので決して未練は残してゐなかつたに、お前がこの様に本心を取乱して御両親に歎なげきをかけると言ふは解らぬでは無いか、あれに対してお前の処置の無情であつたもあれは決して恨んではゐなかつた、あれは道理を知つてゐる男であらう、な、さうであらう、校内一流いちちの人だとお前も常に褒ほめたではないか、その人であるから決してお前を恨んで死ぬ、そんな事はある筈がない、憤りは世間よに対してなので、既に其事それは人も知つてゐる事なり遺書ゆいしょによつて明かでは無いか、考

へ直して正氣に成つて、その後の事はお前の心ごに任せ
から思ふままの世を経るが宜い、御両親のある事を忘れ
ないで、御両親がどれほどお歎きなさるか考へて、氣
を取直してくれ、ゑ、宜いか、お前が心で直さうと思へ
ば今日の今も直れるでは無いか、医者にも及ばぬ、薬に
も及ばぬ、心一つ居處をたしかにしてな、直つてくれ、
よ、よ、こら雪、宜いか、解つたかと言へば、唯うなづ
いて、はいはいと言ふ。

女子をんなどもは何時しか枕もとを遠慮はづして四辺あたりには父と母
と正雄のあるばかり、今いふ事は解るとも解らぬとも覺

えねども兄様にいさん兄様と小さき声に呼べば、何か用かと氷袋を片寄せて傍近く寄るに、私を起して下され、何故か身体からだが痛くてと言ふ、それは何時も氣の立つままに駆け出しいだて大の男に捉へられるを、振はなすとして恐ろしい力を出せば定めし身も痛からう生疵なまきずも処々ところどころに有るを、それでも身体の痛い知れるほどならばとはかなき事をも両親ふたおやは頼もしがりぬ。

お前の抱かれてゐるは誰君どなた、知れるかへと母親の問へば、言下ごんかに兄様にいさんで御座りませうと言ふ、さうわかればもう子細はなし、今話して下された事覚えてかと言へば、

知つてゐまする、花は盛りにと又あらぬ事を言ひ出せば、
一同かほを見合せて情なき思ひなり。

良しばしありて雪子は息の下に極めて恥かしげの低き
声して、もう後生ごしやうお願いで御座りまする、その事は言
ふて下さりますな、そのやうに仰せ下さりましても私わたし
にはお返事の致しやうが御座りませぬと言ひ出るに、何
をと母が顔を出せば、あ、植村さん、植村さん、何処へ
お出遊いでばすのと岸破がと起きて、不意に驚く正雄の膝を突
のけつつ椽えんの方へと駆け出すに、それとて一同ばらばら
と勝手より太吉おくらなど飛来るほどにさのみも行かず

椽先の柱のもとにびたりと坐して、堪忍かんにんして下され、私
 が悪う御座りました、始めから私が悪う御座りました、
 貴君あなたに悪い事は無い、私が、私が、申さないが悪う御座
 りました、兄と言ふてはをりまするけれど。むせび泣き
 の声聞え初そめて断続の言葉その事とも聞わき難く、半か
 かげし軒すだればの簾、風に音する夕ぐれ淋し。

五

雪子が繰かへす言の葉は昨日も今日も一をととい昨日も、三月

の以前もその前も、更に異なること事をば言はざりき、唇に
 絶えぬは植村といふ名、ゆるし給へと云ふ言葉、学校と
 いひ、手紙といひ、我罪、おあとから行まする、恋しき
 君、さることば詞をば次第なく並べて、身は此処に心はもぬ
 けの五からに成りたれば、人の言へるは聞分ききわるよしも無く、
 樂しげに笑ふは無心の昔しを夢みてなるべく、胸を抱いだき
 て苦悶くもんするは遣るかた無かりし当時のさまの再び現うつに
 あらはるるなるべし。

おいたはしき事とは太吉も言ひぬ、お倉も言へり、心
 なきお三どんの末まで嬢さまに罪ありとはいささかも言

はざりき、黄八丈の袖の長き書生羽織めして、品のよき
たかまげ
 高髻にお根がけは桜色を重ねたる白の丈長、たけなが
ひらうち
 平打の銀簪、ぎんかん
あつさり
 一つ淡泊と遊して学校がよひのお姿今も目に残りて、
いっもと
 何時旧のやうに御平癒あそばすやらと心細し、植村さま
おなほり
 も好いお方であつたものをとお倉の言へば、何があの色
うち
 の黒い無骨らしきお方、学問は急らからうともどうで
ついで
 此方のお嬢さまが対にはならぬ、根つから私は褒めませ
 ぬとお三の力めば、それはお前が知らぬからそんな憎く
つきあひ
 ていな事も言へるものの、三日交際をしたら植村様のあ
さんず
 と追ふて三途の川まで行きたくならう、番町の若旦那を

悪いと言ふではなけれど、彼方あなたとは質たちが違ふて言ふに言はれぬ好い方であつた、私でさへ植村様が何だと聞いた時にはお可愛想な事をと涙がこぼれたもの、お嬢さまの身に成つては愁うらからうでは無いか、私やお前のやうなおつと来いならば事は無いけれど、不断つつしんでお出遊ばすだけ身にしみる事も深からう、あの親切な優しい方をかう言ふては悪いけれど若旦那さへ無かつたらお嬢さまも御病気になるほどの心配は遊ばすまいに、さういへば植村様が無かつたら天下泰平に納まつたものを、あゝ浮世は愁うららいものだね、何事も明あけすけに言ふて除のける

事が出来ぬからとて、お倉はつくづく儘ままならぬを傷いたみぬ。
 つとめある身なれば正雄は日毎に訪とふ事もならで、三
 日おき、二日おきの夜な夜な車を柳のもとに乗りすてぬ、
 雪子は喜んで迎へる時あり、泣いて辞す時あり、稚子をさなごの
 やうに成りて正雄の膝を枕にして寐ねる時あり、誰たが給仕
 にても箸はしをば取らずと我儘をいへれど、正雄に叱なほられて
 同じ膳の上に粥かゆの湯をすすする事もあり、癒なほつてくれるか。
 癒りまする。今日癒つてくれ。今日癒りまする、癒つて
 兄様にいさんのお袴はかまを仕立て上げまする、お召めしも縫ふて上げま
 する。それは辱し早く癒つて縫ふてくれと言へば、さう

しましたらば植村様を呼んで下さるか、植村様に逢はして下さるか、むむ逢はして遣る、呼んでも来る、はやく癒つて御両親に安心させてくれ、宜いかと言へば、ああ明日あしたは癒りますると憚りはばかもなく言ひけり。

正まことしく言ひしを心頼みに有るまじき事とは思へども明日あは日暮すも待たず車を飛ばせ来るに、容体ことごとく變りて何を言へども嫌々として人の顔をば見るを厭いとひ、父母をも兄をも女子おなごどもをも寄せつけず、知りませぬ、知りませぬ、私は何も知りませぬとて打泣くばかり、家の中うちをば広き野原と見て行く方なき歎きに人の袖をもしぼら

せぬ。

俄にはかに暑氣つよく成し八月の中旬なかばより狂乱いたく募りて人をも物をも見分ちがたく、泣く声は昼夜に絶えず、眠ねぶるといふ事ふつに無ければ落入たる眼まなこに形相ぎようそうすさまじくこの世の人とも覚えず成ぬ、看護の人も疲れぬ、雪子の身も弱りぬ、きのふも植村に逢ひしと言ひ、今日も植村に逢ひたりと言ふ、川一つ隔てて姿を見るばかり、霧の立おほふて臃おぼろげ気なれども明日あしたは明日はと言ひて又そのほかに物いはず。

いつぞは正氣かへに復りて夢のさめたる如く、父様母様ととさまかかさまと

いふ折うつつせみの有りもやすと覚束おぼつかなくも一日ひとひ二日ふつかと待たれぬ、
 空蝉うつつせみはからを見つつもなぐさめつ、あはれ門かどなる柳に秋
 風のおと聞えずもがな。

日本文学電子図書館

にごりえ・たけくらべ

著 者：樋口一葉

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

日本文学電子図書館